井伏鱒二全集

第十四巻

井伏鱒二全集

第十四卷

筑摩書房

井伏鱒二全集第十四卷
昭和五十年七月二十八日初版發行

著者　井伏鱒二
發行者　井上達三
發行所　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話　東京(291)七六五一(代表)
振替　東京　六—四一二三
印刷　株式會社精興社
製本　改制本印刷株式会社

(分類) 0395 (製品) 73214 (出版社) 4604

目

次

湖水の鮎……三
石垣……八
惜しい人……一一
蟻地獄……一五
誤診……一九
牧野信一の文學碑……二一
後味のよさ……二四
徴用員の頃のこと……二六
小黒坂の猪……二九
姫谷匣鉢蓋……三一
人違ひ……三六
川で會つた人たち……三九
虹のいろいろ……四五
開高健夫人からの聞書……四八
年譜に憑かれてゐた人……五一
太宰治と文治さん……五四

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

九月十二日記……五九
あら井の願法寺……六八
「雨月物語」明治飜刻本……七三
「兒を盗む話」の周邊事……九六
庄野君と古備前……一〇二
岩崎　榮……一〇五
ハゼ類の魚……一〇九
雜　器……一一九
村のムクの木……一二四
炬　燵……一二六
流星騷ぎ……一二九
病　氣……一三九
馬……一四六
嘗ての亡命客……一五〇
青柳瑞穗と骨董……一六一
峠の茶店……一七四

唐木先生……一七八
「雁」の三つの場面……一八〇
中込君の雀……一八三
看　板……一九五
メ　ン　コ……一九七
早稲田の森……二〇〇
窓の外の自動車……二〇八
木山捷平詩碑……二一二
四　十　雀……二一五
田中貢太郎先生のこと……二二三
鳥　の　聲……二四三
釣　宿……二四八
川底の町……二八〇
戰爭中の徵員・平野直美……二八五
羽　織……二九〇
釣　人……二九四

手控帖より……三三五
ヤマメ釣……三四七
私の好きな詩一つ……三四九
風月翁……三五一
風貌・姿勢 その三……三五三
富ノ澤麟太郎……三八五
シンガポールで見た藤田嗣治……三九二
宇野（浩二）さんの魚釣……三九九
大きな木……四〇三
七月の日記……四〇九
四十年前のこと……四一二
ウバメ樫……四一五
あいさつ……四二三
正宗さん……四二八
兩家の爭ひ……四三二
鷗外の手紙……四三六

モグラの庭……四四六
阿部眞之助さんのこと……四四九
大山名人のこと……四五二
五月十六日記……四五五
時計と直木賞……四六〇
佐原の釣……四六四
ナメシ革……四六六
武藏ノ國の住人……四七一
大岳さん……四七五
易たてのこと……四七八
仲人の經驗……四八二
備前牛窓……四九〇
解題……五一一

井伏鱒二全集　第十四卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

湖水の鮎

最近まで私は、富士五湖にはアユはゐないものと思つてゐた。琵琶湖のほかには、アユは湖水では蕃殖しないと思つてゐた。

戰爭前に一度、河口湖にアユを放流したといふ話を聞いた。御坂峠の茶店の主人から聞いたことだが、縣の水產課が琵琶湖產のアユの稚魚を放流し、その年には產卵のため淺瀨に集まつて來たアユが眞黑に群がつてゐた。それを茶店の主人が投網で打つと、魚の重さで網を持ちあげるのに息切れがしたほどあつたと云ふ。しかしアユが育つたのは一年こつきりで、翌年は根絕やしになつてしまつた。河口湖や本栖湖などは琵琶湖と違ひ、アユが蕃殖しにくい湖底になつてゐるらしい。

私はその話をその通り信じてゐた。ところが先月、二百十日の前に用事があつて河口湖畔へ行つたので御坂の元茶店の主人に會ふと、河口湖にアユがまだ殘つてゐると云つた。四月、五月になると、ワカサギが產卵のため群をなして淺瀨に集まつて來る。それを刺網でとると、アユの稚魚が一尾か二尾くらゐ混つてゐるさうだ。

普通、川で生れたアユはすぐ海に下り、幼魚のときシラスなどと同居してシラスと共食ひをしながら育つと云はれてゐる。河口湖のアユはワカサギの幼魚と同居して、ワカサギと共食ひしてゐるかもしれぬ。「それにしても、大正時代に放流した種苗が、よくも絶滅しなかつたものだ。けなげなアユだ」と私が感心すると、「人知れず生きつづけます。平家村の平家の殘黨のやうなものです」と云つた。

河口湖のアユは湖心の深いところで越冬し、川の二年仔のアユと同じやうな生態を送るのだらう。二年仔として生きられる魚は、三年子としても生きられるかもしれぬ。産卵する力のある魚は産卵しなくては死にきれまい。

私は平家の殘黨のやうなアユの話を聞いて、本栖湖にゐるといふアユとそつくりの魚の話を思ひ出した。よほど前に城東町の釣友達が、本栖湖にはアユとそつくりの魚がゐるさうだと云つた。

「季節は八月ごろ。本栖湖の疏水の出口のところに、そこの淺瀬に眞黑になるほど群がつてゐるさうだ。それが本當のアユなら、川へ放流してみたらどうだらう。」

この城東町の釣友達の云つたことを思ひ出し、八月をすぎないうちに本栖湖へ實地に見に行かうと思つた。アユの話は人を興奮させる。

それから數日して城東町を訪ねると、ちやうど先客に境川村の釣友達がゐた。それで本栖湖へアユに似た魚を見に行かないかと誘ふと、善は急げと、さつそく三人一緒に出かけることになつた。やはりアユといふ魚は人を興奮させる。

私たちは甲府盆地から富士北麓に越える新しい道を車で行つた。トンネルを二つ三つくぐると精進湖のほ

とりに出た。ここには毛鉤作りと釣の研究で知られてゐる鈴木魚心さんがゐる。

私たちは豫備知識を仕入れるため鈴木家を訪ねた。御主人は東京へ出かけて留守とのことで、奥さんが私たちの質問に答へられた。それを手帖に書きとめた。

○本栖湖にはアユがゐる。間違ひなくアユがゐる。大きさは三センチから四センチくらゐ。眞夏に川尻の淺瀬に群がつてゐる。

○子供づれの遊覽客が、そのアユをビンブセでとつてゐる。

○ビンブセに使ふ餌は、サナギ、ジャガイモ、米ヌカ。アユと同時にヤマベもとれる。

○本栖湖のヤマベには寄生蟲のサナダ蟲がゐる。だからここのヤマベは、げつそり瘠せてゐる。

○西湖にもアユがゐる。

○精進湖にはアユはゐない。ワカサギはゐる。

○精進湖にも本栖湖にもヒメマスが放流されてゐる。　——以上。

精進湖は折からの増水で、私が五十年前に見たとき澄みきつてゐた水は細濁りになつてゐた。しかし水の色が變つたのは増水のためばかりとは思はれぬ。

本栖湖も増水して、遊覽船の乗場が半ば水につかつてゐた。川尻の水位もぐつと上り、淺瀬にアユの稚魚は見えなかつた。

本栖湖にはアユがいつから栖みついたか、魚心さんのお宅で訊きもらした。「富士北麓開拓史」（萱沼英雄著）に引用されてゐる「水産試驗所資料」によると、富士北麓の湖水で試驗所が魚の放流に着手したのは大

正時代からである。

「大正四年十月二十五日、（試驗所員）西湖出張。

昨日、水產學校ヨリ技手出張（中略）技手伊比忠三郎氏ニ面會シ、種々養魚ノ事ニ付キ談話ヲ交ヘ、氏ノ相模川厚木地方ノ鮎卵ヲシユロ毛ニ粘着セシメタルモノヲ持參シ、水槽ニ入レ置キタレバ實見セラレ度シト、養魚場ニ案內セラレタリ。聞ク所、昨日、船津（河口湖畔）中屋彌會右衞門方ニ一泊、鮎卵ノ一部ヲ同氏ニ與ヘテ、養育放逸セシムベシト命ジタリトノ事ナリキ」

その結果については書かれてないが、アユの卵は孵化しなかつたのではないかと思ふ。その翌年、また棕梠の毛に卵を着けて持參したかどうか、それについての記錄はない。

河口湖へ初めてアユの稚魚が放流されたのは、大正七年五月であると記されてゐる。琵琶湖產の稚魚五貫目、約四千尾が放流された。これはその年の秋、御坂峠の茶店の主人が投網でとつたといふアユである。

本栖湖から歸つて間もなく、境川村の釣友達から手紙が來た。

「城東町から電話がありました。例の本栖湖の稚魚について、地元の人から聞きましたところ、あの湖水のアユが放流用に採取出來ないのは、稚魚（成魚？）が岸に來るのは盛夏の水溫の上つたときだけで、春は湖心の深いところにゐて、採る手だてがないのださうです。先日のやうな冷やかな日には、もう岸に姿を見せないといふことです。成程と合點が行くやうに思はれます。」

それから二、三日すると、意外にも湖畔の鈴木魚心さんから富士北麓の湖水魚の來歷について解說の手紙が來た。（魚心さんの許可を得て、今その一部を寫すが）本栖湖のアユのことではかう云つてある。

「本栖湖のアユについては、昭和四年、當時の山梨縣水産技手、須賀原氏がマスの飼料として琵琶湖産を二、三萬尾移殖したのが始まりで、現在では相當繁殖してゐます。——本栖湖のヒメマスの孵化放流は、もとは精進湖の苗積澤（めうじみざは）で行はれてゐたものですが、大正五年に一萬尾を本栖湖に移殖したところ成績がよかつたので、仝十五年に精進湖孵化場を本栖湖川尻に移轉。昭和元年より十七年間（中略）千島産ベニマス卵、十和田湖産ヒメマス卵を、年に十五萬粒——三十五萬粒、本格的に移入放魚することになり、田澤湖産のベニマス卵まで孵化放流したやうですが、これは死魚多く失敗したやうです。」

ヒメマスの飼料にするためアユを飼ふ。琴を斷つて鶴を煮るやうなものである。

數年前、アユをアメリカの川に放流して失敗したといふ話があつた。滿洲事變の頃は、松花江に放流して駄目だつたと聞いた。初めに川でなくて外國では一度湖水に放流し、それから川に移したらどうだらう。

石垣

僕の記憶の間違ひだらうか
どうも不思議である

關東大震災の直後のことだ
僕は燒野原の街趾を通りぬけ
竹橋附近をとぼとぼ歩いてゐた
ふと濠の向うの大石垣に目をとめた

いつ見ても堂々たる石垣である
特にその日は大きな大きな大石垣に見えた
石組は型通り荒切石の布積みで

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com